

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	安藤 拓生 (あんど う たくお)
○学位の種類	博士 (経営学)
○授与番号	甲 第1261号
○授与年月日	2018年9月25日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項 学位規則第4条第1項
○学位論文の題名	プロフェッショナルとしてのデザイナーの持つデザイン態度 (Design Attitude) の探索的研究
○審査委員	(主査) 八重樫 文(立命館大学経営学部教授) 佐藤 典司(立命館大学経営学部教授) 守屋 貴司(立命館大学経営学部教授)

<論文の内容の要旨>

本論文の研究目的は、国内のデザイナーの持つデザイン態度に関する理論的な検討とその実証的解明にある。デザイン態度とは、デザイナーやその専門家集団が持つ価値観・文化・志向性であり、デザインマネジメントを成功に導くには、マネジャーはデザイナーの持つデザイン態度を受け入れ・理解し、マネジメントに応用していくことが必要であるとされる。

しかし、本論文のような経営学分野におけるデザイン態度に関する研究は、国際的にも萌芽的な段階であるため、その研究知見の蓄積はまだ進んでおらず、理論的検討も十分ではない。また、先行研究で検討されている知見は、欧州や米国のコンテクストを反映したものであり、日本国内のデザインを取り巻くコンテクストを反映した専門性の検討は行われていない。そのため、国内のデザイン活用の文脈に整合していない可能性が高く、獲得すべきデザイン態度の指針を示すための詳細な検討とその実証的解明が必要である。

本論文はこのような課題に対して、デザイン研究およびプロフェッショナル研究における先行研究の批判的検討から得た理論に基づき、国内外のデザイナーに対する詳細なインタビュー調査を実施し、その内容を理論的に分析することで、国内のデザイナーのデザイン態度に関する独自の構成概念を明らかにするものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章 本研究の課題

第1章	デザインの専門性の理論的検討
第2章	専門的職業としてのデザイナーの理論的検討
第3章	デザイナーの持つプロフェッショナリズムの理論的検討
第4章	本研究の課題の整理
第5章	国内のデザイナーの持つデザイン態度の探索
第6章	デザイナーの持つデザイン態度の比較分析—イタリアと日本の事例—
第7章	デザイン態度の形成の過程とその要因の探索
第8章	デザイン態度の理論的検討
終章	デザイン態度の形成に向けて

以下、各章の概要を示す。

序章では、本論文の課題と背景、目的が述べられている。

第1章では、本論文の理論的基盤を整備するために、デザインの専門性に関する先行研究を整理している。特に、これまで欧州や米国で実践されてきたデザインに関する研究から、デザイン論における5つのディスコース「①人工物の創造としてのデザイン、②省察的実践としてのデザイン、③問題解決活動としてのデザイン、④思考方法としてのデザイン、⑤意味の創造としてのデザイン」がまとめられ、それらがどのように展開されてきたかについて詳しい検討が行われている。さらにここで、これらに通底するデザインの専門性として、「総合化」という専門性が導かれている。

第2章では、専門的職業としてのデザイナーがこれまでどのような歴史的背景を経て社会的に形成されてきたのかについて概観し、その専門性について考察を行っている。また、専門職業がどのように形成されるのかについての理論的な枠組みを示すために、プロフェッショナル研究の知見を整理し、プロフェッショナルリゼーションの観点から議論の明確化が行われている。ここでは、デザインの社会的な形成を、①1880年代のイギリスにおけるアーツ・アンド・クラフツ運動、②1920年代のドイツにおけるバウハウス工芸学校の教育、③アメリカにおけるインダストリアルデザインの成立、の3つの歴史的な運動とその展開から確認し、近代デザインの専門性の形成過程と、そこに通底する「美」に関する専門性が明らかにされている。

第3章では、デザイナーの専門性について、専門職業の態度的側面であるプロフェッショナルリズムの概念に焦点を当て、デザイナーという専門職についての理論を検討している。特にプロフェッショナル研究におけるプロフェッショナルリズムの検討において、プロフェッショナルの持つ「コミットメント、自律性、信念、アイデンティティ」といった概念が整理され、プロフェッショナルリズムを形成する要素の理論的な検討が行われている。さらにここまでの理論検討（デザイン研究およびプロフェッショナル研究）の成果から、本研究の鍵概念である「デザイン態度」について整理を行っている。

第4章では、第1章から第3章まで検討してきた先行研究の知見を整理し、本研究の課

題の明確化が行われている。加えて、先行研究の検討から得られた議論をもとに、デザインの専門性を「総合化」と「美」に関する態度に分類し、そこにプロフェッショナリズムとデザイン態度との関係性を加えたフレームワークが構築されている。

第5章では、まず本論文の課題と目的に合わせた研究方法が検討（グラウンデッド・セオリーの選択根拠と適切性の検討）され、その方法論に基づき国内のデザイナーを対象に行ったインタビュー調査の分析が行われている。結果として、5つのデザイン態度の要素「①新たな意味を創造する、②喜びを与える、③論理性を重視する、④深い洞察を得る、⑤美しさの追求」と2つの信念の要素「社会貢献の信念、仕事に対する誠実さの信念」が明らかにされている。

第6章では、さらにイタリアで活動する日本人デザイナーを対象にしたインタビュー調査の分析とその結果が検討されている。継続的なグラウンデッド・セオリーによる分析から、新たなデザイン態度の要素として「⑥あいまい性を保持する」というデザイン態度のカテゴリーが形成された。さらにここで、デザイン態度に対して「探索的なデザイン態度」と「問題解決のデザイン態度」の2つの異なるカテゴリーが形成されている。加えて、国内のデータとの比較において、専門職業社会やビジネスモデルの差異とデザイン態度との関係が検討されている。

第7章では、デザイナーのデザイン態度が形成される過程とその要因の分析が行われている。その分析方法として、非可逆的時間の中に複線経路（trajectory）と等至性（equifinality）という視点から複雑な人間の経験経路を描写する文化人類学の研究アプローチである複線経路・等至性アプローチ（TEA: Trajectory Equifinality Approach）を採用している。結果として、デザイン態度とデザインのプロフェッショナリズムの多くの要素が、実務経験を通して形成されることが明らかにされた。本論文における調査では、「新たな意味を創造する」「美しさを追求する」以外のデザイン態度は、実務経験を通して獲得されていることが明らかになり、組織におけるデザイン文化が、デザイン態度の形成に影響を与えていることが明らかになっている。加えて、組織のデザインの考え方や文化と、プロフェッショナル個人のプロフェッショナル・アイデンティティの認識に差異がある場合、個人の中に葛藤を生み出し、デザイン態度の形成に影響を与える可能性があることが示されている。

第8章では、先行研究の検討と第5章から第7章で明らかになったことをもとに、改めてデザイン態度に関する理論的な考察が行われ、本論文の発見事実の整理とその考察、また限界について述べられている。さらに、終章では改めて本論文の成果と課題を提示している。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、近年のビジネス分野において、デザイナー以外の多くの非専門家がデザインの考え方を身につけることが急務となってきたにもかかわらず、非専門家が獲得すべき

デザイン能力や態度的要素が十分に明らかになっていないことを課題として、デザイン態度の概念に着目し、その要素の探索を行った研究成果である。審査委員会は、口頭試問および論文審査の結果を踏まえて、本論文の独自の成果及び新たな知見として、主として次の諸点を確認し、それが評価に値すると結論付けた。

第1に、デザイン研究およびプロフェッショナル研究における先行研究の批判的検討および、国内外のデザイナーに対するインタビュー内容の分析検討により、日本国内ではまだ明らかにされていない、国内のデザイナーが持つデザイン態度の構成概念を初めて明らかにしていることである。これまでのデザインに関する研究では、デザイナーを中心としたデザイン従事者への貢献を目的として、デザイン行為やそのプロセスの技能的特徴とそこに必要な能力的側面を明らかにしようとするものが多かった。一方で本論文は、経営学的視野からビジネス諸分野におけるデザイナーに限定されない非専門家への貢献を目的としており、デザイン行為やプロセスにおける技能的特徴や能力的側面の検討ではなく、デザインに対する姿勢・信念・態度的側面としてのデザイン態度を明らかにしている点が大きな成果である。

第2に、デザイナーのデザイン態度の構成概念とともに、その形成過程と要因の分析が詳細に行われていることである。デザイナーの態度形成については、特別な業績を持った高名なデザイナーには特徴的な要素が見出されているものの、多くのデザイナー間ではある程度自明の共通した経験が共有できているため、従来のデザイン研究において詳細な検討はあまり行われてこなかった。この点がデザイン研究だけでなく、プロフェッショナル研究の側面からの検討視野を持った本論文の特徴的成果と言える。

第3に、デザインの専門性について、先行研究およびインタビュー調査から詳細な検討が行われていることである。デザインはその対象適用領域の広さから一般的な定義が曖昧にされ、また理論構築よりも実践に重きが置かれてきたことから、学術研究におけるその理論的な検討が少ない。よって文献（特に国内の文献）も非常に限られることにより、その専門性の学術的検討はこれまで十分に行われてこなかった。本論文ではデザイン論に関する海外研究が広く参照され、国内のデザイン研究ではまだ十分に紹介・浸透していない知見までが網羅されていることに加え、プロフェッショナル研究の知見からデザインの専門性を照射したものは他にあまり類を見ないことから、この点で本論文の独創性が主張できる。

このように、本論文は貴重な研究成果であり、博士学位に値する論文として高く評価できる。とはいえ、本論文には次のような課題があることを指摘しておかなければならない。

第1に、本論文では、国内のデザイナーが持つデザイン態度の構成概念が明らかにされているものの、それらをどのようにビジネス分野に活用するかについての指針が明らかではないため、経営学に対する貢献がまだ不十分であることである。本論文で明らかにされたプロフェッショナルとしてデザイナーが持つデザイン態度がそのまま、非専門人材が発揮すべき態度となり得るわけではなく、非専門人材にとって必要なデザイン態度がどのよ

うなものであるかについて、またその展開方法についての検討に課題を残している。

第2に、日本の企業や社会文化におけるデザインやデザイナーの位置付けの検討が十分でないことである。そのため、本論文が対象とするデザインの概念が、日本文化独自の組織・分業・職制においてデザイナー以外の専門性に浸透している可能性が排除できず、本論文の目的遂行のために、デザイナーを対象にした調査を優先的に実施する根拠が十分に説明できていない。組織分業体制や社会的分業における各専門性の協業によってデザインが実現されていると考えれば、デザイナーを対象にした調査だけではなく、非専門人材がもともと持つデザイン態度の要素も広く明らかにされる必要がある。

しかしながら、これらの課題が本論文の基本的評価を低めるものではなく、いずれの課題とも、今後本論文を発展的に研究してゆくための課題でもある。以上の論文審査と公聴会、口頭試問結果を踏まえ、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本申請者は、2014年3月に立命館大学大学院経営学研究科企業経営専攻博士課程前期課程を修了し、2014年4月に立命館大学大学院経営学研究科企業経営専攻博士課程後期課程に進学し、以下の論文および学会報告を行っている。

論文は、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2015]“The Strategic Use of the Context Integration Capabilities of Industrial Designers” (査読有論文) Economics, Social Sciences and Information Management, Taylor & Francis Group, London、安藤拓生・後藤智・八重樫文 [2015]「デザインマネジメント研究の射程と課題—CADMC2013の文献レビュー—」(査読無論文)『立命館経営学』第53巻第6号、安藤拓生・八重樫文 [2016]「プロフェッショナルとしてのデザイナーの持つデザインの志向の実証的研究に向けた理論的基盤の検討」(査読有研究ノート)『立命館ビジネスジャーナル』10巻、安藤拓生・八重樫文 [2017]「デザイン態度 (Design Attitude) の概念の検討とその理論的考察」(査読無論文)『立命館経営学』第55巻第4号、安藤拓生・後藤智・八重樫文 [2017]「デザインマネジメント研究の射程と展望—DMA2017の文献レビュー—」(査読無論文)『立命館経営学』第56巻第4号、安藤拓生 [2018]「デザイン態度 (Design Attitude) の国際比較研究試論—日本とイタリアの事例分析—」(査読有論文)『立命館ビジネスジャーナル』12巻である。

学会報告は、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2015]“Strategic use of context integration capabilities of the industrial designer” (The 2015 International Congress on Economics, Social Sciences and Information Management, Bari, Indonesia)、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2015] “The Ranges and Challenges for the future of Design Management” (16th Eurasia Business and Economic Society, Bahcesehir University, Turkey)、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2016] “Investigating formation factors of designer’s attitude for problem solving and exploratory enquiry” (R&D Management Conference 2016,

Cambridge University, UK)、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2016] “Investigating Designer’s Problem-solving and Exploratory enquiry Attitude for Service Innovation” (17th International CINet Conference, Politecnico di Torino, Italy)、安藤拓生 [2016] 「プロフェッショナルとしてのデザイナーの持つ『デザインの志向 (Design Attitude)』の探索的研究」(日本経営学会第 90 回大会、専修大学)、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2017] “Dual nature of designer’s attitudes toward design-led innovation” (Design Management Academy Conference 2017, The Hong Kong Polytechnic University, Hong Kong)、Takuo Ando, Kazaru Yaegashi [2018] “International Comparative Research Study on Design Attitudes: A Comparative Analysis of Cases in Japan and Italy” (R&D Management Conference 2018, Politecnico di Milano, Italy) である。こうした論文掲載および学会発表実績があり、質的および量的に優れた研究実績をあげている。

本論文の公聴会は 2018 年 7 月 19 日 (木) 9 時 00 分から 10 時 20 分まで、立命館大学大阪いばらきキャンパス AC941 において開催した。引き続き同室において口頭試問を 10 時 30 分から 11 時 30 分まで実施した。

審査委員会は、本学大学院経営学研究科企業経営専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表等の様々な研究活動、また公聴会等の質疑応答を通して、申請者が専攻分野について研究者として自立するに十分な研究能力と、その基礎となる学識を有する者と判断し、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、申請者に対して「博士 (経営学 立命館大学)」の学位を授与することが適当であると認める。